フランス中等教育国語（文学）教材史の展望

——一八七二～一九六七——

中西一弘

フランスにおける文学教育は、とおく中世にまでさかのぼることができる。近代にはいってからも、十七世紀以降のコレージュ、革命以後のリセーで古典（語）文学の教育が盛んに教授された。しかし、国民文学としてのフランス文学を中等教育の中心教材として認識するようになったのは、日本の明治維新後のことである。長い前史があるとはいえ、フランス文学の教育の歴史はちょうど日本近代教育史の歩みとほぼ等しい百年を経たにすぎない。その意味で、やはり長い前史をもつ日本の文学教育を考えるとき、フランスの史的変遷はわれわれの興味をひくものがあろう。幸い、「中等教育におけるフランス語カリキュラムの一世紀（一八七二—一九六七）」という論稿を、『フランス教育雑誌』第七巻、一九六九年四・五・六月合併号に見出したので、次に訳出し、比較検討の資料として提出することにしたい。原文につけられた注は付表をのぞき全部割愛した。

なお、執筆者のアンドレ・マルーユ氏は、一九六九年当時フランスのツール大学に職を得ていたが、以後、カナダのシャーブルク大学で教授として活躍している。著書には、『文学と今日の青少年』（一九七一）があり、若者の読書傾向の調査やその問題点の解決に努力するなど、文学教育の専門家である。

あらゆる部門から、われわれの学校制度の若返りが求められている。政府の諸委員会も、教育改革委員会、「指導」委員会、教員養成委員会等等の未来をめざした名称をもって発足しているのだ。

文学教育に特別な関心をよせるわれわれは、中等教育のフランス語カリキュラムが一世紀来どのように発展したか、とくにカリキュラムの中で著名な作品の学習がどのように取り扱われてきたかを、ここに、明確な形でたどってみたいと思う。

なぜこのような歴史的展望をするのか。一八七二年以来フランス語の教育が貴族文学（ラテン語の文学——訳者注）の地位を奪い取り、一九三七—三八年に、ある最盛期に到達しえたとしても、現代のところでは、提供されているものとその提供の対象である新しい

教育大衆の要求との間に相応じえない断絶があるからである。ルイ・クロLouis Crosの「教育爆発」ということばは、大きな変動をあらわすものである。

一九六〇年から一九六七年にかけて、カリキュラムに適切な補正はほどこされた（慎重に改善された指導方法については言わない）が、結局のところ、不充分になった古い建物の外装だけをつくろったにすぎないと、われわれには思える。新規に実施する時は来ているのだ。

○

文学のカリキュラムの歴史は、一八七二―一九六七の間にあって、三つの大きな時期に区分することができる。

―一八七二―一九〇二の時期。それはラテン語教育に比べて、全く補足的とみなされていたフランス語教育が、漸進的に確立する時期である。

―一九〇二―一九三九の時期。リセーとコレージュで学ぶ青年（少人数。概してフランスの裕福な階層の出身）に適切な文学的教養が決定された時期。

―一九四五―一九六七の時期。先例のない生徒数の増加（一九三八年中等教育においては四二万五千人、一九六五年には二〇〇万人以上）に直面して、応急処置をとらざるをえない時期。

一世紀全体をおさめるので、この論文は図式的にならざるをえない。が、すくなくとも、その細部においてはたしかにひどく複雑なこの発展の、大きな道すじを明らかにするよう試みたい。

一、フランス語教育が貴族の文学を征服する（一八七二―一九〇二）

第一帝政から第二帝政まで、われわれの中等教育は旧政体のコレージュ（アンシアン・レジーム）の伝統を再び続けることで満足していた。「キケロ（古代ローマの文豪、雄弁家、政治家。ラテン語教材の中核―訳者注）を読め。」と（大アルノーを引きながら）デュパンルー大司教は、フランス語作文を学ぼうとしていた青年たちに言ったものであった。実際、古典語学習は中枢的な位置を占め、ほとんど他を圧していたのである。言語学者ミシェル・ブレアル Michel Bréal（一八三二―一九一五）は、この時期の学校組織を知っていて、ラテン語学習の重圧を想い起こしている。「八年ないし九年の間、ラテン語に数時間を費さない日は全くなかった。」そして彼はこの形式主義の害をあらわにする。この時期のわれわれの教育を研究した者は、スニイダー G.Snyders が革命前の教育を定義づけた閉じられた教育という性格を、そこに再発見せずにはいない。

ジュール・シモン Jules Simonの活動、一八七一―一八七三

文学教育の重大な改革が一八七〇―七一の戦争の荒廃から引きおこされた議論の中から結果されていった。そこから最終的には古典語学習の若返りとフランス語学習の著しい推進が結果されていったのである。

この創始期にあって、国防政府の公教育大臣であったジュール・シモン Jules Simon（一八一四―一八九六）は、彼の改革案が最初痛烈な失敗を喫したとはいえ、決定的な役割を演ずることになった。

敗戦直後、ジュール・シモンは教育を生活に向けて開放すること

が不可決の要件と判断した。一八七一年より実施されたアンケートは、最終学年の生徒の歴史的地理的知識に重大な欠陥のあることをあきらかにした。

他方、J・シモンは外国語教育発展の必要性を認めた。しかし、時間を作らねばならなかった。「時間がいかにわずかであろうとも、それに従って学ぶことを知らねばならない。なぜなら、一日に盛り沢山のことがあったことを想い出すであろうから。私は捜しまわった。そこで次の三方法しか見出せなかった。すなわち、ラテン語詩を削除し、ラテン語作文ならびに、全体として記述課題を減少することである。」

一八七二年九月二四日、J・シモンは上の意味をもつ通達を学校長に出した。この宛名は、彼が教育現場の改革について教育人の協力を得ようとしたことをはっきりと示すものである。彼は校長の主宰のもとでの教授たちの月例会合、ならびに大学区長クラスの招来による文学と古典の教授の会合さえも準備した。

他の大きな革新は、作品研究により大きな地位を与える必要性を認めたことである。「文学は傑作において学ばねばならない。」そして、僅かで不調和な見本（抜萃のテキストのこと――訳者注）で満足してはならない、とした。これが、われわれの知るかぎりにおいての最初の公式の非難である。われわれが「文学の断片」と呼ぶところのものに対する。

この穏当だが決定的な積極さは、きわめて歓迎されないものとなっていく。J・シモンの強力な対抗者はオルレアンの大司教、デュパンルーであった。デュパンルーの教区の「小神学校長と教授にあてた書簡」において、政府が考えている処置は「古典学の滅亡とフランスにおける高等な知的教育の完全な破壊となるであろう。」と憤怒の司教は断言した。そして、J・シモンは、古典語の名誉に対して「一つの罪を犯した」――国民公会以来の最も重大な、――と付け加えている。「青少年時代の思い出」の一節は、これらの激しい反動の起源について教えてくれる。「デュパンルー氏の古典学習に対する絶対的な信仰は次のように表わされる。すなわち、これらの学習は、彼にとって、宗教の一部となっていた。ヴィルジル virgile はすくなくとも聖書と等しく聖職者の知的教養となるものと彼には思われた。」

たしかに、J・シモンには支持者があった。われわれがすでに指摘したミシェル・ブレアルの「フランスの公教育に関する数語」というきわめて謹遜した標題（タイトル）の書物が出版されたのは、この時期にあたるのである。ブレアルも同様に形式的学習を非難し、作品解釈、作品全体の講読を推奨する。その文章には、アドルフ・フェリイエール以来よく使われている用語によると、クラスを「主体的（積極的、活動的という形容詞 active――訳者注）」にするための教育的助言までも人々は見出す。生徒が問題の解答を見出すであろう地点まで導くこと、そして、生徒自らの才能で解かせるために適当な時に立ち止まらせること、クラス全体をあるイデーなりある語について熟考させること、ときにはクラス全体に、ときにはただ一人に問いかけること……」教育とは、彼によると、「事実を見出し観察する技術、真実を理解し確認する技術」である。クロード・ベルナール Cl. Bernard（「実験医学序説」は一八六五年刊行）の思想（イデー）が、たぶんここに反映しているだろう。

一八七三年、J・シモンは政権を離れざるを得なかった。L'Ordre moralの体制が始まっていった。一八七三年六月十日、公教育高等審議会（デュパンルー大司教はこの構成メンバーであった）は一八七二年の通達を廃止する申し立を採択し、事実上死文字と化し

た。

ジュール・フェリーJules Ferryの業績

七年後、J・フェリーが前の新しいイデーを再び取りあげ、この度はそれを決定させていく。改革に一段と有利に働かせるため高等審議会を著しく拡大したのち、J・フェリーは主として大学入学者資格試験とカリキュラムと指導法の改革を準備した。

バカロレアでは、「不毛で時代おくれの練習」であるラテン語演説の作文を、「最終三学年での文学芸術カリキュラムにもとづくフランス語の試験」に代えた。面接試問と解釈も等しく「これら三学年で学んだ作家全体」にもとづくことになっていた。これら主要な革新は一八八〇年六月十九日の政令にあらわれている。

一八八〇年の教科課程がラテン語学習の開始を第六学級〔小六に相当――訳者注〕におくらせ（当時は第八学級〔小四に相当――訳者注〕から始まっていた）、（第六学級に始まっていた）ギリシャ語学習を第四学級〔中二に相当――訳者注〕までおくらせていることをよく注目してから、フランス語学習のカリキュラムと指導法の改革に歩みを止めよう。逸話的な小事実であるが、示現的でもあるのは、全国コンクール授賞に際して「通例の演説」をラテン語でおこなった最後が一八八〇年四月四日であったことである。

＜時間配当とカリキュラム＞

一八八〇年八月二日、J・フェリーは、時間配当・カリキュラム・指導法を定めた重要な法令を出した。

フランス語―ラテン語―ギリシャ語の時間配当はそれまでと比べて特に減少した。すなわち、一九三〇年に一〇〇時間であったものが八〇時間となる（ファルキュシFalcucciの計算によれば、一八八〇年以前の時間配当の指示はかなり不確定である。）この八〇時間のうち、二一時間がフランス語に、ラテン語とギリシャ語には五九時間が割当てられている。フランス語が市民権をえたといっても、当時はまだ小さな部分をゆだねられていたのである。

＜カリキュラム＞

カリキュラムは明確に示されている（一覧表を参照のこと、後掲）。それらは一つの革命が完遂されたことをはっきりと示すのである。それ以後、フランス語の教育は偉大な作品にもとづいておこなわれるから。

作品の選択には意味深いものがある。十七人の指定された作家は次のように分類できる。

中世	2	
十六世紀	1	（モンテーニュ）
十七世紀	10	
十八世紀	3	

慎重に距離が置かれている（最も近い作家はビュフォンで、一世紀前（一七八八年）に死んでおり、ヴォルテールとモンテスキューは一世紀以上も前（一七七八年、一七五五年）である）。しかし、一つの例外（この例外は重要であることを知ろう）がある。第三と第二学級（高二と高三に相当――訳者注）のカリキュラムでは、「十六世紀、十七世紀、十八世紀、十九世紀の散文家と詩人たち」を読ませるようにしていることである。

その上、十六世紀の文学は軽視されていた（サント・ブーヴが十

六世紀文学の復権のため「十六世紀詩歌の歴史的批判的展望」を出版したのは早く一八二八年であったが、カリキュラムにロンサール（十六世紀の詩人――訳者注）の名前が載せられるには、その年より七四年間を待たねばならない）。

以後のカリキュラムがそれらの作家を承認している点から判断すれば、このカリキュラムの選択は優れていたと特記することができよう。が、それは伝統の強固な存続について語ったほうがよいのかもしれないが……

＜指導法＞

指導法は十五段落に分けて明確に述べられている四ページの覚書の中にはっきりと定められており、そこにはJ・シモンのイデーの反映を見出すのである。

原則としては、生徒の記憶力と同時に判断力を鍛練すること、生徒の思考を表現させるように導くこと（第一段落）、生徒たちのより直接的な参加を誘い出すこと（第十四段落）、協同作業（第七段落）。

規則の学習（第三段落）、形式的な分析練習（第四段落）を減らすこと。フランス語作文では、無駄な敷衍作文を避けること、生徒に自分自身で中心イデーを発見させるよう習慣づけること（第八段落）。

最後にそして特筆すべきことは、文学の学習においては、「もっとも大きな位置」を作品解釈に与えること（第八段落）である（この段落は、古典語文学に関することではあるが）。

ジュール・シモンの委員会と一八九〇年のカリキュラム

基本方針に大きな一歩が示されたのであるが、学習内容の過重、古典語の位置づけ、科学の導入についてのような新しい論議がまきおこされてくると、基本方針をいかに実行に移すかが検討されねばならなくなった。一八八八年、J・シモンは、教科の改善を検討するための五六人からなる政府委員会の議長となる。

委員会の論議と熟考は一八九〇年一月二八日の新カリキュラムの発布となった。その中心点を取り出そう。

――一つの重要なイデーが認められた。すなわち、子どもの知的能力と「世紀ごとに、そして、日に日に増大する科学の全体」との間に不均衡があること。

根本的な確認である。なぜなら、それは将来において現代教育学に求める改革、今日の改革の根底をなすものであるから。一八九〇年には人々はまだそれほど遠くまで行かなかった。しかし、「英知の始まりは忘却を許すことであろう」という点を認めていた。（エリオが文化について与えた有名な定義の立脚点はそれではなかったか？）

――第二点、名作と深く関係することの役割が特筆大されている。「あらゆる時期のすぐれた作家に親しむこと、過去数世紀において人間精神が考え、感じ、欲したことを、まず作家との親交によって、彼らから学ぶこと、つづいて、それを実例として、生徒自身が考え、感じ、欲する技術を身につけること、そこに教育の本質さえある。」その他、

「われわれ自身の固有財産といば、講読と作品解釈である。それは中等教育の本質や生命でさえある。」

〈カリキュラムの内容〉

一八八〇年のカリキュラムと大きな差はない。ビュフォンの選文集が第五学級から消えた。第四学級にはフェヌロンの「死者の対話」が入った。第三学級では「オラース」より「シッド」をすすめている。

であるが、一つの注意――重要性をもつ――が「古典的」とは、十七世紀の作家にかぎらず、十八世紀と十九世紀の作家も考慮に入れなければならない、と明確にしている。

そして、事実、第三学級には十八世紀の作家が現われた。ルソーが、その選文集によって。

しかし、十九世紀の作家はまだ一人も指名されていない。

文学史に関しては、一つの警戒がなされた（その種の弊害がまれではないことを露わしている）。それは、文学史を組織的に教えるよりも、「作品解釈と講読に際して生徒に断片的に示されていた作家たちの諸活動」を位置づけることにかかわっている。「この種の歴史はあまり大きく取り上げる必要はない。」このような回想はあるリセーには今日でも必要なのではあるまいか。

改革の反応

もし、これらの改革と同じイデーが一九〇二年の訓令に再び盛られた事実からこの改革を判断すれば、不公平となろう。われわれはリセー、ルイ・ル・グランの歴史を研究したギュスターヴ・デュポンーフェリエの蒐録による文献に有意義な証拠をもっている。デュポンーフェリエは教授たちの集会討論の記録をとくに非常に多数引用している。

G・デュポンーフェリエは、教授団体がJ・シモンの考えにきわめて嫌悪の情を抱いていた点を示している。一八七二年から七三年の学年末において、「教授たちは、フランス語作文の学習が全く成果をあげていないことを、その学習が生徒の側においてなんら努力すべき対象とならず、生徒の精神にもたらすものがなかったことを認めた。」さらに、「ラテン語とギリシャ語文法を減らすことはすこしも、ほとんど全く望んでいなかったので、教授たちは懸命に抗議し、その結果、その文法は救われたのである。第三学級と第二学級においてさえも、絶えずその文法に訴え、それを暗記させ続けた。」

J・シモンの失脚は、したがって、ルイ・ル・グラン校にあっては一つの開放として歓迎された。自ら古典語学習の効能の主たる理由を述べているデュポンーフェリエは古典語学習の擁護者と信じるる。古典作品に匹敵する近代作品からもたらされるものではなく、有名校の教授たちはそこの生徒の活動をみごとに引きおこす術を知っていたのである。すなわち、「教授は教室を導き、学習するのは生徒たちである。」この時代では、「良い生徒がルイ・ル・グラン校を卒業するとき、一生涯ラテン語原典でラテン作家の作品を読むことができる。」たしかに、ルイ・ル・グラン校にあっては、「人文学は彼らの領地のようであった」そして、地元の人々のことばによると、「学校の壁までがラテン語を語った。」のである。この領地内では、一九〇二年の改革が三十年にわたる発展の到達点であったにもかかわらず、それを最悪の手段であるかのようにしか受けとめていなかった。

一九〇二年の改革

しかし、フランス教育の歴史家は、一九〇二年ならびにその後（訓令は一九一一年に出た）に出された法令の重要性を強調する点で、今日一致している。それらの法令が教育上の転回ととくに構造改革を示すからである。すなわち、A、B、C、Dという「コース」を創設し、BとDが古い特別課程を中等教育中に統一することを確保したのである。

この時期に感知された大きな問題は、百科全書的教育を維持することの不可能という点であった（これはJ・シモンの中心的イデーの一つとしてすでに見てきたところである）。「中等教育は学習の多様化をもってしてのみ守られる」のである。しかし、中等教育の統一性は、現代の事柄に処する知性への諸学習という共通の方向づけによって維持されていく。これらの数語は一つの革命の全姿を現わすのである。改革発案の一人であるルイ・リアールLouis Liardは言う。「理想主義的・演繹的な天分をとりわけ持っているこの国には、現実主義の大きな浴槽が必要である。」概して人人は、十九世紀をとおしてなお優勢であった「閉じられた教育」を、非難していた。一九〇一年のある講演会でラヴィスLavisseは、「フランス国境も南北の境も知らず、ただその名前だけで外国を知っているにすぎない若いフランス人」、を作るにいたった教育を責めている。その若者たちは「世界地図の上のどこにいるかを示しえず」、「一言でいえば、二〇世紀に関する事柄に無知」であると。G・ランソンLansonもいくつかの講演会において同様な警告の鐘を鳴らし、それは明晰で説得的な小著「大学と現代社会」の中におさめられている。それは、「経済競争の烈しい時代にあって、フランス民主主義の諸要求に大学の営為がこたえる」という点にあった。

文学の観点からみれば、人々がその消失を願ったのは、伝統的修辞学である。「修辞学のクラス」という名称は、リセーの学級名からさえも現われなくなっていく。（デュポンーフェリエが認めているように、第一学級の名称は「雄弁」というのを止めて、「文学」となった。）前以て設定されている諸規則を組み合わせる知的活動に代えて、現実の自覚化と、とりわけ著名な作品の採用を人人は求めた。

同様に、最も推奨された練習課題は作品解釈であった。というのは、そこでは生徒が一つの文献、一つの考えに直面するからである。文法的、美的、道徳的な観察を交互におこなうことを通して、分析、批判、熟考、判断などの全能力が鍛練されるはずである。

一九一一年の訓令は、したがって、一八九〇年の考えを精密にしつつ再び取りあげているのである。一九一一年の訓令には、早くも、われわれが中等教育段階において今日なおも活用しているような、作品解釈の「哲学」と方法論とを見出す。であるから、その訓令を長長と論評しないことにし、特徴を現わす一つの引用に限ろう。

「適当なある分量であるが、一つの全体に形成している興味深い教材（テキスト）を選ぶこと、そして、その全体にあっては、同一方向を指向した一連の着眼点を選ぶこと、難解個所を明示し、討議のあとで解答すること、テキストから目をそらさせる脱線や文章の勢を殺（そ）ぐパラフレーズとか、生きた一ページを無益な解剖にさらさせる誤まった機械的な区分とかを避けること」。ピュール・クララックPierre Clarac が最近フランス語教育に力を注いで書き上げられた見事な書物（テキスト）においても他のことは言っておられない。「フランス語教育は作品

学習にもとづいてのみ確固となりうる。教授は、文学の傑作を読む労苦をその生徒にはぶいてやろうと生徒が知り考えねばならないものを口述するが、それは教授の責務を裏切るものである。」

教材（テキスト）に関しては、狡猾な独断が再び入りうるのである。ランソンは一九〇一年にその危険性を指摘している。「文学の学習は作品（テキスト）によってされるのがよい。高等教育の研究対象である文学史は中等教育では厄介者である……。作品講読に先んじる文学史の講義はおうむ返しの学校となる。」一九一一年の訓令もこの非難を重ねてはっきりと表明していく。

しかし、習慣はなんと執拗な生命をもつことか！これほど明瞭な警告ののちにおいても、口述講義の濫用は減少しない。クララックは、その書物のすばらしい一ページにおいて、（一九一〇年と一九二〇年の間で）それがなおも存続していたことを次のように回想している。

「当時のフランス語教育は独断的であった。教師は講義し、われわれがそれを暗記した。その講義では教師が事実を示し、判断を公式化した。しかし、その判断は事実のようにして示されていた。われわれの作文や口頭発表では、われわれは大胆にも問題を割切ってしまっていた。問題の根本について知らないにもかかわらず。抽象的に、教義（ドグマ）のように暗記すべき公式を設定したのち、人為的に選ばれた例の助けをかりて、現実がその判断を確認していると証明することを試みるのであった。われわれは時としては作品（テキスト）を結びつけて終り、決して作品から出発することはなかった……」（三三ページ）

残念なことに、一九六九年のわれわれのリセーにおいても、このような実践が全く存在していないと、言い切ることができようか。

＜カリキュラム＞

一八八〇年と一八九〇年とに関連して、革新されたものに限ろう。時代順にみることにする。

――中世の散文家と詩人の詞華集の導入（第六学級、第五学級、第二学級）。ポーラン・パリスPaulin Parisとその息子ガストンGastonによってもたらされた新しいフランス中世文学研究の結果である。

――十六世紀ならびに十七世紀初頭の詩人たち（マロー、ロンサール、デュ・ベレ、ドービネ、レニエ）の導入（第二学級）。不当な忘却ののちの復位。

――ディドロの出現（第一学級）

――最後に特筆すべきこととして、偉大なロマン派の人人の間でとくに指名されたのが、シャトーブリアン（第四学級）、ラマルティーヌと＞ユーゴー（第三学級から第一学級まで）、「十九世紀の主要な歴史家」（ミシュレの名は第四学級にみられる）。

各世紀の割当はきわめて不平等である（十七世紀がきわめて特別視されている）が、全体としては、改革は重要であったと認められよう。

＜科学と人文との問題＞

以上のようにして、三〇年以上の戦争（一八七一―一九〇二）は、フランス文学教育と中等教育一般の刷新に至ったのである。

われわれは、この改革に二つの主要な特色を見出した、ランソンの見解に従ってみよう。

――古典的教養は「科学精神」に心を開（あ）けるべきである。「若者たちはコレージュを卒業するとき、人間の知恵が形成された主要な

道すじはなんであるか、いかなる対象に対し、いかなる成果を得るためにそれぞれの方法が適用されているのかを十分に理解しておらねばならない。」

「多数の法則と事実とを彼らに知らせること、それが問題ではないであろう。そうでなくして、精選された実例によって、数学の真実とはなにか、それはいかにして精密化されたか、天文学の、物理学の、歴史学の真実について、以上のことを学習することである。さまざまな秩序をもつこれらの真実の一つ一つはいかにして形成されたのか。どのような方法によって明らかにされるのか。どのような表徴によってそれと認めるのか。ここに学習の主たる利点となるべき知識がある。」

――他の利点は、人間の条件に関する最上の知識である。「人間生活を知り、今あるわれわれにどうしてなったかを知る人間。大切な作品を検討する中で、個人の意識と社会の問題はすべて一つ一つ明らかになろう。いかなる教義も強要されないし押しつけられないので、若者たちは現代生活において、上の諸問題に接近し、生存の意味を知り、大きな誤りを犯さない……ように準備されるであろう。」

〈均衡？〉

歴史家ポール・ジェルボPaul Gerbodは、その著「十九世紀フランス大学の状況」で次のように結論している。権力側と聖者たちと有産階級と大学との争いは、二〇世紀初頭、その決着を「あいまいな状態」に終わったと。

彼によると、あまたの攻撃の犠牲になった教師団体は、社会からいくぶん孤立した形となった。

「文学批評、もしくは古典作家の翻訳、詳細な歴史と教科書の作製などに閉じこめられて、創造的才能を欠いていた。文学と芸術は教師のもとから逃げ去っていた。科学と技術の進歩に副次的な形でしか参与しなかった。その教養は年とともにますます古くさくなり、無益のものとなった。そのまわりには、政治・経済の強力な思想が生育し発展していた……」

この悲観的な見方は、大学の役割を「創造的才能」の発表ととり、創造的才能の育成の面を忘れていると、われわれには思われる。ところで、一八七〇年から一九〇〇年の間にリセーで教育された世代の人々を、その先人たちより劣っていたと言うことができようか。（にもかかわらずその世代の大部分の人々は大戦中に死んでいかねばならなかった。）

反対に、この時期に与えられた文学形成の堅実さについては多くの証言がある。アシェットHachette社によって創設された「フランス古典」の小叢書には、われわれの目にもその堅実さは明らかであり、その中にあるものは今日もなお販売されている。その中の多くは誠実さと明晰さとの模範である。ブリュンチィエール Bruntière のボワロー Boileau、レベリオ Rébelliau の二行のボスュエ Bossuet、プティ・ド・ジュルヴィルPetit de Julleville のコルネーユCorneille、G・パリスとジャンロアJanroy の年代記作家の抜萃Extraits des Chroniqueurs、ブランシュヴィックBrunschvicg の有名なパスカルPascal、ランソンのラシーヌ Racine など……

われわれの考えによると、十九世紀末に中等教育が冒されていた根深い害は全く他のことであった。が、それを識別するには時を

必要とした。ジョルジュ・ヴェーユGeorge Weillほどの老練な歴史家さえも、暗示を与えていない。「大切なことは」と彼は結論している。「中等教育に就学できる若者に一般教養を与える中等教育をフランスに維持すること、そして、その教育が民主主義に必須のエリート育成に貢献することである。」実際に、つづく半世紀において二つの大戦があらゆる障壁を破壊させ、機構全体を再考させるにいたるのである。

二、一九〇二―一九三九、ブルジョワのための文学的教養

一九〇二年の制度の讃美者のなかにあって、フランシスク・フィアルFrancisgue Vialは（一九三五年に）その制度が本質的に不十分である点を攻撃した。一九〇二年の教科課程が伝統のもつ旧套墨守から抜け出た人文主義を結局において定義づけたとしても、それは依然としてエリートの教科課程なのである。その年において、公立リセーとコレージュ（男女あわせて）はかろうじて十六万余の生徒だけを収容していた。

レオン・ベラールLéon Bérard内閣の（束の間の）改革は次のようにしか説明のしようのないものである。それは、一九二三年、前期中等教育の近代コースを廃止して、全部の生徒にラテン語を四年間、ギリシャ語を二年間学ばせるようにした。レオン・ベラール自身、準備中の政令の趣旨を表明した共和国大統領への報告書の中で明確に述べている。短い就学期間を終えると、一般的な職種に就職をよぎなくされている子どもたちを技術教育または高等小学校の方へ追いやって、彼の目に最良と映った古典的教養をその他の生徒たちに確保することを自分の義務と信じていた、と。実際においては、一九二三年十二月に可決された政令も適用されなかった。次の年の選挙によって、議員の大部分が入れ代ったからである。

一九二五年のカリキュラム

したがって、一九〇二年の継続と改善を表明する野心をもって発布されたのは、次の政令〈一九二五年五月十三日〉であった。

その内容を分析すると、次の三つの考えが明らかになる。

㈠　純粋な教養の概念と功利性の概念は二律背反的でない。諸学習科をとおして知性が獲得した能力は、教養を、その語の認識論的な意味において、活動性（opératoire）に化するのである。この訓令の文章において、上の要求は次のように表現されている。すなわち、中等教育は生徒をある定まった職業に対しても、活動の大きな方向づけさえも決して準備しない。「それ以上のことをするのである。その任務は、いかなるものに対しても準備せずして、すべてのものに適応できるようにすることである。中等教育は、生徒の未来の征服のための強力で微妙な道具、すなわち、力強く繊細な思想を生徒の内に練精する」。

㈡、一九〇二年のコース別編成の〈枠づけをはずす〉ことは重要である。これ以後、三つの選択（ラテン語とギリシャ語、ラテン語と外国語、外国語だけ）は再組織されて、共通教科（フランス語、歴史と地理、理科）の学習時間内に合併されることになった。ここには、「中央学校」の熱烈な称賛者で、中等教育の指導者F・フィアルの考えに近い「合併」の思想が発見できる。

しかし、同時に、ラテン語、ギリシャ語との関係を離れてフランス語教育（学）の問題が投じられているのをみる。ところで、この教育（学）は、セーヴルの女子高等師範学校での女子中等教育への要求と、F・ブリューノBrunot、G・ランソン、P・デジャンタンDesjardinsのような人々によって、改善されていった。Cf、ファルキュシィはその学位論文の結論において、この（フランス語）教育（学）は可能であり、成果の多いものであると認めている。しかし、このような意見はすべての人々に共有されるには遠かった。

(三)、一九〇二年のカリキュラムでは、AとBコースの理科の時間は、きわめて不十分な時間しか与えられていなかった。「十七世紀の紳士（オネットム）がラテン語教育によって形成されていたとすれば、二十世紀の教養人は科学的諸学科と密接に関係することによってはじめて作り出される。」（訓令、一一五ぺ）このようにして、理科の時間割（第六学級から第一学級まであわせて）は一週に五時間が十二時間三〇分まで増加した、もちろん、すぐに、人々は授業の過重を歎くことになった。

〈一九二五年のフランス語教育〉

(a) フランス語のカリキュラム

中世、十六世紀、十七世紀—三十六人も指定があり、大きな部分を占めている—一九〇二年のそれと比べて相異点は極めてわずかである。しかし、一九世紀の地位はとくに大きくなった。（三十三人の指示）。「大作家」（シャトーブリアンChateaubriand、ラマルチイーヌLamartine、ユーゴーHugo）に加えて、ヴィニーVignyとミュッセMusset、それに無記名で「詩人」、「小説家」、「批評家」、「科学者」、「政治家」などが加わっている。

外国の大作家については、第四学級から第一学級まで、外国語のカリキュラムの中に挙げられているにすぎない。それでも、第一学級のAとBコースでは、フランス語の教師は次のことを思い出すであろう。このために十六時間が配当されていること、しかし、カリキュラムでは三十九人の作家について話すようになっていることを。

(b) 訓令

一九〇二年との連続性は明白である。しかし、なおいくつかの革新があげられる。

——詩の教育的価値について。（ヴェルレーヌならびにボードレールは、ボードレールはさらに下まわるがカリキュラムの中では記載されていない。が、かれらの「講読」はそこに入ってきたと言えないだろうか。）

——抜萃テキストを文化史の文脈の中に「位置づける」ために、文脈に構成された文学史の役割について。

このようにして、「大作家に触れて得た生徒の知識が脈絡のあるもの」にしたいと願ったのである。

(c) 代表的な教科書：「シュヴァイエ・オーディアChevaillier Audiat共編」の教科書。

この時期の教科書のうち、J・Rシュヴァイエ（ルイ・ル・グラン校正教授）とP・オーディアの共編による有名な「フランス語作品Textes frangais」は、アシエット社の刊行で一九二五年のカリキュラムに合致したものであるが、当時の文学教育の

やり方について一つの典型的なイメージを与えてくれる。これらの書物は四半世紀にわたるフランス教科書の「ベスト・セラー」となった。（一九五〇年に20世紀に関する一冊が加えられた。）

これは大切な選集である。（五冊あわせて一五六八ページに達し、選出抜萃された作品は歴史的展望のもとに、重苦しく衒学的になるのをうまく避けた序文紹介を加えて、載せられている。）

――人々はこの編者たちが公のカリキュラム以上にうまく各世紀文学の均衡をとりえていることに気づく。

	「カリキュラム」の記載数	上記教科書のページ数
中世	三	一二八
十六C	四	二〇六
十七C	三十六	四一四
十八C	十一	三二四
十九C	三〇	四九六

――以上のように教科書の「殿堂（パンテオン）」（上記教科書を指す―訳者注）では、十九世紀は名誉ある地位にいる。しかし、選択された作品の多くは、わけても詩については、驚かされるところがあるようである。最近の選集（アンソロジー）を比較すればとくにそうである。興味本位に参考例として、一九六一年刊のG・ポンピドゥPonupidouの選集（アシェット社発行）をとりあげよう。（G・ポンピドゥは一九〇六年に生まれ、一九二〇年代にその中等教育を終えている。われわれが認める相異点は、したがって、カリキュラム作製者の世代とその教え子たちの世代との嗜好の変化を現わすものである。

	シュバイエーオーディア編教科書	ポンピドゥ編教科書
ゴーティエ	六編	一編
ネルヴァル	二〃	十二〃
ルコント・ド・リール	三〃	二〃
ボードレール	五〃	四十三〃
ヴェルレーヌ	五〃	二十四〃
ランボー	三〃	七〃

――最後に大切なことは、（この問題に再び触れることがあるだろう）シェヴァイエ・オーディア編の選集が、若者たちに雑多な文学を提供したという、先輩たちの欠点をまぬがれていない点である。シャトーブリアンの回想録（死後公刊されたLes mémoires d'outre-tombe）のような記念碑的作品を三編の抜萃で、ザイーグ（ヴォルテール作―訳者注）を一編、カンディード（同じくヴォルテール作）も一編、（ビュフォンは九編もあるのに！）となっている。セビリヤの理髪師Le Barbier de Sévilleとフィガロの結婚Le Mariage da Figaroは一編ずつ。ダンクールDancourtデリルDelille、ルブランLebrun、ギィルベールGilbert、などの群小作家を序文、テキスト、注を付してまで保存したわけを今日不思議に思うのである。

一九三七年―一九三八年のカリキュラム

これはジャン・ゼイJean Zayの尽力によるカリキュラムであ

って、その改革の意志はよく知られているところである。

彼の署名のもとに発令された公式の文書（カリキュラムを決定した一九三七年八月三十日と一九三八年四月十一日の法令、一九三八年九月三〇日の訓令）は、一九二〇年ならびに、一九二五年の文書よりもなお一段と完全で統一ある全体を形造っている。カリキュラムの変動はあったが、一九三八年の訓令は現在にいたるもまだ更新されていないことを付け加えておこう。したがって、その訓令は今もずっと有効なのである。

公文書の分析からどのような重要な点が明らかとなるだろうか。簡単に言えば、中等教育の目的が数段にはっきりと決められたこと、主体的方法が公式の保証を与えたこと、フランス語教育に関しては、わずかな修正ではあるが外国文学についての指示がついになされたことである。

＜中等教育の目的＞

公文書の組織。十六ページが目次にさかれている。一九二五年の公文書は十ページであったのに。

一般的テーマ「中等教育は子供の精神の形成ならびに子供に一般教養を与えることをめざしている。」この思想はすでに一九二五年の訓令にあったが、再び取り上げられ発展させられている。

このテーマは、また、デュルケム Durkheim がボルドー大学、ついでパリ大学で教育の社会学という講義において発展させたテーマと類似していることに気づくであろう。この講義は「フランスにおける教育の進展、L'évolution pédagogique en France」という著書の内容となったのである。

この教養は人間にその時代を十分に理解させ、その職業を越えて考えることを許すものである。「真に人間らしい人間はその職業によって侵されるままになっていない。彼は職業を意識し、愛するが超克し支配する。」デュルケムは言う。「精神は事物について考えさせるために作られているし、精神を形成するのは精神に事物を考えさせることによってである。」

したがって指導法は、形式主義と権威主義を避け、子どもの「経験」をふまえ、子どもに問題を課し、その経験を拡大していくことにある。つづいて、諸教科の連繋を保つための実践上の注意（なぜなら、生徒の学習時間の細分化がよくないと思われていたから）と学級指導のための注意とが与えられている。

＜フランス語教育＞

ここにもまた、一つの哲学と一つの方法論とがあった。（ヴュイベール Vuibert 社版二十二～九十七ページまたは七十四ページ）。一九二五年、一九〇二年さらに一八九〇年などの古い訓令の段章を参照すれば、この訓令が建築物の一種の完成となっている印象を与えるであろう。

作家の学習については、訓令は、前期中等教育において、いくぶんかの拡大を認めている。

第六学級。古代の物語とお話の導入。世界探検に関する物語。

第五学級。「世紀の伝説」、「水車小屋だより」

第四学級。G・サンド Sand、メリメ Mérimée

第三学級。シャトーブリアン

大体において、十九世紀文学に対する開放―まだ十分な慎重さをもって―がある。しかしスタンダール Stendhal、もバルザック Balzac も、フロベール Flaubert も名をあげて指定されていない

ことに留意してほしい。この時期には、モーパッサンMaupassantは外国の多くですでに「古典」となっていた。フランスのカリキュラムが作家を古典の域に達したと認めるには、常にその死後半世紀をまたねばならないと言えよう（ドーデDaudetは一八九七年に死んだ）。

〈外国文化の導入〉

訓令の実に見事な一パラグラフにもかかわらず、人々はカリキュラムにおける、世界への開放についてはほとんど意識しない。「人類の諸要求を理解し、人類の思考の中に入って行けるようにするために、生徒はとくにさまざまに異なる人間と民衆について知らねばならない。……」

実際のところ、カリキュラムは、講読用として、第六学級に外国のお話と伝説、第四学級と第三学級に、十六世紀から現代までの「歴史の時間に学習した時代の物的、精神的文化に関する」外国の翻訳作品に限っている。これは慎重な取り扱いではないと言えるようである。

ただ一学級においてのみ、それは第二学級で、ニーベルゲンの歌Niebelungen、ゲーテGoethe、シェークスピアShakespeare、セルバンテスCervantes、ダンテDante、トルストイToïstoï、ドストエフスキーDostoïewski、キップリングKipling の探検が可能となっている。しかし、それらすべてが一年の内で、しかも、カリキュラムで定められた漠大なフランス作家の補足としてである！

一九三九年、中等教育にとって、一時代の終焉か。

第二次世界大戦前には七人に一人が（公私立の）中等教育に進んでいたと考えることができる。したがって、この教育は少数者のそれにとどまっていた。

この少数者は、アントワヌ・プロストAntoine Prost の語るところでは、少数の固定した集団の取りかこむところであった。教師の数は一八八七年から一九二六年までほとんど変わらなかった。教師の三分の二は裕福でない階層の出身である。中等教育の教師集団についての研究論文は、教師がその集団の教養を身につけていたことを示している。

この社会学的考察はカリキュラム発展の研究によってもたらされた印象を確認するものである。たしかに、一九三九年のカリキュラムは旧政体のコレージュのそれとは異なっている。が、なおも閉じられた、静止的な世界という印象を受ける。つまり、一九〇二年の規定との大きな相異点は、作家の選択にはないのである（一覧表参照）。「建築」の「割合」は同一のままであった。相異点は、教育一般に関する指示と指導法の注意とに関して精確になった点にとくに認められる。それらの公文書のすぐれた特質や、ときには「称賛に価する」ほど重要な点について指摘できることはもちろんである。

外国文学に与えられた部分が皆無とはいわないが、最低であったことは第二次世界大戦前夜のフランス中等教育制度自身の上に厳存する襞の一つの証拠である。

三、教育爆発時代のフランス語教育学

わが読者は、一九四五年以来、「教育爆発」が課した、（増加した）生徒の受け入れと配置という重大な問題を経験的によく知っている。われわれはこの生徒数の増大にもとづく教育計画にあって、次のことがどのようにおこなわれてきたかを、ここで示すことにしよう。A教科の指導法に関して、Bカリキュラムの内容に関して。

A　新しい教科の指導法

第六学級に進む生徒数が六倍に増加したので、学級の平均水準を低下させる結果になった。それは統計的に明確な真実であって、多くの教師はそれを理解していないままでいる。なおも「現代若者たち」の知的水準を非難している教師をみかける。その水準は一九三九年以来全く不動なのである。増大することはあっても（G・フリードマンFriedmannが「平行学校 L'école parallèle」と呼ぶマス・メディアの教育効果を理由として）。しかし、リセーならびにコレージュが今後学齢期の66％余の生徒を収容するのであるから、昔であれば進学させなかった多くの生徒まで拡大して現在のところ受け入れているのである。

次の二方面にむかって努力が払われている。

(1)知性・能力の区分を最善におこなうこと。

人々はそこで、それまではほとんどすべて社会的条件または偶然に委ねられていた、生徒の進路指導を一段と合理的なものに組織化する努力を払ったのである。これが「観察課程cycle d'observation」の創設（一九五九年一月六日の省令、第三章）の重要目的である。

「第十一条――カリキュラムに含まれている教科の指導に従事しつつ、教師は各生徒の趣味と能力を系統的に観察する。」

「第十二条――観察過程中ならびに学年末には必ず、進路指導委員は、生徒の可能性に応じたコース選択の適合性を確かめるための、または、コースの変更を示唆するための有益な情報をすべて家庭に提供する。」

実施のための最も重要な二つの通達は、観察のための「諸問題に取り組む」ことを勧告、推奨した一九六〇年九月二十三日の通達と、フランス語の授業中の生徒観察により限定した一九六〇年一〇月十九日の通達とである。この（十月十九日の）文章は（故O・ブランシュヴィク Brunschwig 夫人の執筆になる、と言われている）、文法分析の学習、より正確には、「文の性質に関する学習」構造と意味との関係に関する学習をとりわけ上の目的のために活用することを提案している。

・進路指導の問題は、知られているように、原則しか解決されていない。委員の推薦がしばしば死文化しているからである。進路指導は同一学校内において、より容易におこなわれるようになることが、目下の人々の希望である。ここに、中等教育コレージュ C.E.S.を構成する新しい型の学校を創設した重要な理由がある。しかし、教育出版物においては、かなり悲観的である。真の「中等学校école moyenne」がわが国に存在しえたかもしれないという「郷愁（ノスタルジー）」を、人々はしばしばそこにかきたてている。A、プロストProstは、ランジュヴァン・ワロンLangevin-Wallon改革案の理想が、約束の土地であるが決して到達しないものの象徴という

価値をもっている、と正しく指摘している。

(2)「特別学習活動travail dirigé」の創設

この領域においても、多くの公文書が現われたにもかかわらず、従事者の調子は、郷愁のそれである。人々はいつも想い出すであろう（P・クララック自身も131ページ）、一九四五年に中等教育の指導者（局長）であったG・モノMonodによって発起され、一九五三年に彼の辞職と同時に中止された「新しい学級classes nouvelles」の実験が呼びおこした数々の失なわれた希望を。

基本的な通達は、すでに前に引用した一九六十年九月二十三日のそれと三月三十日の通達である。すでに、一九三八年の訓令に「特別学習活動」に関する指示はあったが、この一九六〇年と一九六二年の通達は、格段に詳しくまた格段に厳密である。というのは、この間に、小グループの学習が法制化されていたからで……（例えば、フランス語の公式の時間配当は、第六、第五学級近代コースでは六時間（4＋2）である。「カッコ内のはじめの数字は学級全体を対象する授業時間を示し、おわりのは最大25名のグループ学習用の授業時間を指している。」）

一九六二年のこの通達は様々な理由から、引用するに価すると思われる。なぜなら、それは、―対話の場面と静かな記述作業が交互にくるべき―小グループ（15名）学習の方法学を示唆するからである。教師の新しい任務が示されている。時としては「活動の指導者」となり、またある時は、個人的なガイドになるが、常に名作と若き読者との仲介人となること。というのは、「フランス語教育の真の目的は、すぐれた作品または生徒自身の努力をとおして、生徒の思考を話しことばならびに書きことばで正確に楽々と表現することを教える点にある。」のだから。さらに、講読 la lecture explicuéeが「叙述の方法と思考との強力な結合」を明らかにする点が強調されている。このような諸学習が、「同化」と「適応」による思考の発展という、ピアジェpiagetのテーゼをみごとに持ちあげていると、われわれは進んで言いうるであろう。しかし、われわれはまたモンテーニュを引くこともできよう。彼にあっては、その禁欲精神は創造的な力に導くのである。

(3) 作品への新しい接近

小冊子「フランス語と古典語教育」は、一九六八年セーヴルの国際教育研究センターにおける討議に際して、優秀な全国視学官がおこなった発表を集めている。これらの発表物を分析すると、つぎのテーマが明らかになる。

――一九三八年の訓令の指導理念（イデー）は確認されている。その上、「文学と文法の教師ならびに教生のための覚書」を除くと、その時以降新しい訓令は発令されていない。覚書の本文は、その密度と正確さがすばらしいが、当時（一九五三年）フランス語の総視学官の首席であったジャック・デジャルダン Jacques Desjardinsの執筆によるものである。解釈はその価値を全面的に保っている。「対話、産婆術はわれわれの中等教育と一体のものである。」（J・ボコチャノ）

――しかし、時代のしるしであろうか、解釈は、美的考察ならびに感動の働きへより大きな地位を与えるよう要請されている（P115）

L・フォコンFauconはその発表の中で、「評釈commentaire」がとりうる個人的側面と調査―もし可能ならグループによる―と発表のような新しい型の学習の興味について強調している。

そこで、作品と読む行為とは、その形成過程において考察されねばならないのである。（そこには、「再創造的」読書に関するサルトル理論―言及されてはいないが―の反響が見られはしないか？）三つの観点から次のことが言えよう。

(a)作品はすべて個人的経験の結果であり、浮彫りである。例えば、「パンセ」の中に宗教的教義の表現を捜すことができる。そこにパスカルの生きた経験の表徴を捜すならば、数段と興味が増すであろう。ここに、文学の最近の動きの反響をもう一度見出すのである。例えば、一九三九年以降に刊行されたジイド、クローデル、モーリアック、グリーン―これだけしか引用しないが―の日記類が、作家の内的生活とその文学的創造との緊密な関係を示していることは確実である。ガエタン・ピコンGaètan Piconのような随筆家は、この点に関して理論化への試みさえもおこなっている。

(b)同じく、読むことは、「自己の発見」への誘導のように説かれているのである。A・ボコチャノの引用によるJ・グエノGuehennoのことばは、この自己発見が複雑な作品、深奥の探究そのものであるという事実を強調している。すなわち、「若い人々を偉大な個人の前に、偉大で奇異な芸術家の前に立たせよう。その時われわれは次のことを希望するのである。彼らがその人たちの声に耳を傾け、その人たちの苦悩を認め、そのため、たぶん、その人たちの深奥部まで自ら進んで行ってみたくなるようにと。」

(c)最後に、教師自身、傑作の再発見というこの仕事の中に無関心でおれないことが、上記の発表にすかし模様のように現われているのである。生徒と教師との対話においては、教師は受取人なのである。さらに、作者、生徒、教師の三者の会話においては、教師は「態度決定」をし、その全人格にかかわってくる。なぜなら、J・デジャルダンの美しいことばによると、「教師はすべて、同時に、彼の知っていることと、彼の現在ある姿をとりわけ、教える」のであるから。

全体として、教師の役割に関する新しい概念を、これらのページにわれわれは見出すのである。したがって、一九三八年の訓令も改訂されるのがよりふさわしいであろう。その上、これは総視学官の願いでもある。すくなくとも、後期中等教育に関しては。しかし、カリキュラムそれ自体は、人々が希望しうるような組み直しがおこなわれていない。

B　カリキュラムの再検討

一九三七年のカリキュラムには数多くの部分的修正がもたらされた。記憶のため、次に公式の文書をかかげておこう。

――一九六三年五月七日の省令（第六・第五学級に対する）

――一九六二年六月二三日と一九六三年五月二二日の省令（第四・第三学級に対する）

――一九四七年四月十八日の省令（第二・第一学級に対する）

第一点。カリキュラムにみられる配分にはほとんど変化がない。

中　世――4（指定数）
16世紀――2（〃　〃）
17世紀――20（〃　〃）
18世紀――9（〃　〃）

19世紀――11（〃　〃）

ここかしこに、復位と、また逆に追放とがある……。中世の（トリスタンとイゾルデをわれわれは考えるのだが）重要な物語が常に指定されているのではない。16世紀では、ラブレーの名は出てこない。モリエールの1≪増加≫（一九三八年では5が6に）は、ラシーヌの後退（5に対して3となる）によって補われている。犠牲者が二人。フェヌロンがその作品テレマックとともに、そして、さらに驚くべきことに、セヴィニエ夫人を。

18世紀には、ヴォルテールとルソーの著しい増加と、ようやくのボオマルシェ出現。

19世紀については、引かれている作家は一九三七年のと全く同一。「散文のすぐれた作品」、「韻文のすぐれた作品」という規定が、第一学級の教師に、スタンダール、フローベル、バルザックのもう一つの作品（小説）を、ボードレール、ネルヴァルの作品（詩）とともに導入することを許すということはまちがいないことだが……

ラテン語学習に関しては、かなり大胆な提案がなされている。主要なラテン作品を生徒によく知らせるため――対訳とは別に――それらの翻訳の大々的な活用を奨めているのである（第五、第三、そしてとくに第一学級において）。

外国文学については、第二学級の芒大な（そして不可能な）カリキュラムより他には示唆もない。（Tコース、第一学級を除く）そのカリキュラムについてはすでにわれわれは触れたところであるが……したがって、30年以前と等しく許しがたい欠陥が存続。

一九六五―六六年に最終学年用に定めたカリキュラムは一つの可能性をもたらしている。

「20世紀文学の導入（一時間）。すなわち、教師は生徒の能力と趣味にもっともよく答えると思われるどの作品でも選択する自由をもつことになろう。」

ひどく遅いこの開放（なおも無指名）にもかかわらず、今世紀文学に対するフランス語カリキュラムの沈黙に人々は驚くであろう。われわれはすでに三分の二を過ごして来た時点にいるというのに……世界的に称賛をうけているきわめて傑出した作家のだれ一人として指名されていない。たとえば、ペギー、プルースト、J・ロマン、ヴァレリー、ジロドー、コレット、マルロー、クローデル、デュアメル、R・ロラン、サン・テクジュペリー、モーリアック、モンテルラン、アラン、カミュなど……。

同様に、もし高校生がヘミングウェー、スタインベック、フォークナー、コンラッド、チェーホフ、トーマス・マン、ブレヒトを知ろうと望めば、彼は教室外でそれを学ばねばならないはずである。

たしかに、このことは時代錯誤的態度の保持を示すものである。

以上の短い歴史的展望からなにが結論づけられるであろうか。

まず、伝統のまさに過度な重荷が明らかになったと思われる。付録の一覧表を参照してもらいたい。そうすれば、一九六〇年のカリキュラムと一八八〇年のそれとの間に親戚関係を見るであろう。（いや、さらに年代をさかのぼることができたであろう。そして、ヴィクトル・クーザンVictor Cousin の一八四〇年のカリキュラムを、また、一八〇三年の精練されたフォンタナFontanasのカリキュラムさえ引用することができたであろう。）

現在活動中の再検討委員会は、先輩たちのように、古いリストを取りあげて、いくつかの名前をつけ加えたり、そこここ削除したりして、その作業を進めていくのであろうか。

というのは、カリキュラムの内容に関する新しい決定が外国文学に大きく門戸を開くことを予想させるように思われるからである。われわれのリセーは、今日の小説、演劇、映画のかたわらにあって、なんと閉じられた世界なのだろう。外国においての実施状況を調査すれば、われわれもどのような新路線を開発しうるかを示すであろう。われわとしては、ポーランド共和国の中等教育のカリキュラムを研究し、計画統制を意図するその国にあって、リセーの地平を拡大するめざましい意欲を認めたのである。

わが国のカリキュラムの中で、等しくわれわれを驚かせることは、作品の全体においてその作品を探究させるよう高校生を導く配慮が大きく、短い抜萃という歪曲したプリズムを通してではないことである。大学入学検定試験では、三問題中の一つを選択するのだが、一問は受験者の個人的読書を報告させ、かくかくの作家・作品の読書からえたものの評価をさせる問題である。

最後に大事なこととして、高校において読まれる名作のリストが「成人中心的」基準でもって決定されることが全くなくなるようわれわれは望むのである。われわれの考えを次にはっきりさせておこう。

○ 流行の語を用いると、作品の若人に与える「衝撃」は、大人が想像しうるものではない。ただ一例だが、意味深いのであげると、第四学級では、例えば、「オラース」よりも「ルジッド」よりも何倍も「魔の沼」が喜ばれている事を再三再四認めてきた。なぜか。それは、生徒には極めて縁遠いことばを話す、黄金時代の人々の論争（オラースやルシッドを指す――訳者注）よりも、感傷的な物語の結末により熱烈に心うたれるからである（マリーはほとんどかれらと同年齢で、16歳）。ある栄養物は時期を早めて与えることはできない。

○ 社会学的考察が同様に必要である。社会はいずれにおいても、それぞれ明瞭もしくは暗黙の文化的範例をもっている。デュルケムがそれに言及し、今日では外国ならびにフランスの社会心理学者も触れている。リントンLinton、ヴィゴッキーVygotski、コンバール・ド・ローヴ夫人Chombart de Lauweわれわれの社会のような社会はどんな範例をもたらしうるのか。ファリィエール氏Fallères（一八九九―一九一三の間に上院の議長ならびに大統領となった。――訳者注）、もしくはドウメルグ氏Doumergue（一九一三―一九三四の間に下院、上院の議長ならびに大統領になった――訳者注）の時代の範例と同一のもので、それはあるのか。

もちろん、若者たちが考えていることを知らねばならないだろう。たしかに、若者たちの趣味と読書について、多くの調査（アンケート）がなされた。しかし、われわれの知るところでは、次のものは少なくないのである。それは、大人があらゆる観点からみて模範とした名作について、若者たちの反応ぶりを調査したものが、である。

現在ツール大学の人文学部で実施中の調査研究にわれわれが課題としているのは、その問題なのである。そして、次の論文でその報告ができるであろう。

最近の大胆でみごとな論文で、J・ヴィトヴェルWittwerは改革者に現在課せられている問題を明瞭に述べている――一方では人人は、生徒の興味と欲求を考慮に入れていない、――そして、その時は、愛好心と野心をもつ生徒を試験まで導くための間接的な動機

づけしか得られないのである。

——他方では、人々は生徒の趣味と欲求を配慮する、そして、文学教育は問題をもつ作品に限定されるであろう……。

J・ヴィトヴエルは、決然たる革新のカリキュラムと、問題意識、劇化、詩朗読による作品への新しい接近という方法学とが生み出しうるものを示している。過去の名作へ導きうるものは、現在の名作なのである。「われわれの意見によれば、ブレヒトからコルネーユへ、ブレルBrelからヴェルレーヌへ、シリウスSiriusからモンテスキューへ、デスカルビd'Escarpitからヴォルテールへ……と進まねばならない。」

問題がみごとに提示されているとわれわれは思う。もし、われわれがこの激動の時代にあって、文学教育にかけがえのない創造的価値を保持しようと欲するのであれば、この問題を長く放置することはできないのである。

（大阪教育大学助教授）

カリキュラムに指定された作家一覧表

	1880	1902	1925	1937	1963/67
＜中　世＞					
中世作家選集		6－5－2	5－3	6－5－3	6－5－3
ロランの歌	2	2	4	4	
トリスタンとイゾルデ					
ジョワンヴィルと他の年代記作家たち	2	2			
中世の詩人					3
寓話作家たち					
＜16世紀＞					
ラブレー					
モンテーニュ	2	2－1	2－1	1	1
プレイヤードの詩人たち		2	3－2	2	2
＜17世紀＞					
コルネーユ	3-2-1	5-3-2-1	5-4-3-2-1	4-3-2-1	4-3-2-1
パスカル	1	1	1	1	1
ラ・ロッシュフーコ					
セヴィニェ夫人	4	3－2－1	3－2－1	3	なし
ラ・ファイエット夫人					
モリエール	2-1	5-3-2-1	5-4-3-2-1	6-4-3-2-1	6-5-4-3-2-1
ラ・フォンテーヌ	6-2-1	6-5-4-2-1	6-5-4-3-2-1	6-5-2	6-5-2
ボシュエ	3－2－1	2－1	2－1	2	2
ラ・シーヌ	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1	3-2-1
ラ・ブリュイエール	2－1	2－1	2－1	2	2
フェヌロン	5-1	6-5-4-1	6-5-1	5	なし
サン・シモン		4－2			

カリキュラムに指定された作家一覧表（数字は学年を示す。日本と逆で六が最低学年、一が最上学年。数字が多いのは、多学年にわたって教材化されている作家であり、重要視の度合を示すものとなっている。）

	1880	1902	1925	1937	1963/67
＜18世紀＞					
マリヴォー					
アベ・プレヴォー					
ヴォーヴナルグ					
モンテスキュー	3	1	1	2	2
ヴォルテール	4-1	4-1	3-2-1	2-1	4-3-2-1
デイドロ		1	1	1	1
ルソー		2-1	2－1	1	3－1
ボーマルシェ					
シェニェ					
ビュフォン	5－1	6-5-1	1		
リヴァロル					
＜19世紀＞					
詩人達		6-5-4	6-5-4-3-1	3－2	2
B・コンスタン					
シャトーブリアン		4	4－3－1	3	3
ラマルティーヌ		3－2－1	3－2－1		
ユーゴー		3－2－1	3－2－1	5 (＊)	5－4(＊)
ミュッセ			1		
ヴィニィ			2－1		
ネルヴァル					
メリメ				4	4
バルザック				(＊)	4 (＊)
G・サンド				4	4 (＊)
スタンダール				(＊)	(＊)
サント・ブーヴ					
歴史家たち			4－2－1	3－1	
ドーデ				5	5
フロベール				(＊)	(＊)

(＊) 印は≪名作からの抜萃≫の中に、これらの作家の作品１つを、第３学級ならびに第１学級において、教師が採択できることを示す。